

---

# 放浪の鷹

宮里 新

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

放浪の鷹

### 【Nコード】

N0358X

### 【作者名】

宮里 新

### 【あらすじ】

突如世界に現れたハームと呼ばれる化け物。人々はハームの脅威に対しルールと呼ばれる組織を結成し対抗する。

それから100年後の世界で主人公鷹梨 将兵は日夜ハームを狩っていた。

そんなある日、将兵の前にファントムと呼ばれるハームの集団が現れる。ファントムとの邂逅をきっかけに世界は終焉へ向け加速する。

## 第0話 「プロローグ」(前書き)

この小説は異世界召喚物のファンタジーな世界から数千年経った世界はどうなっているのかと言う発想から生まれた作品です。従って今作の舞台はファンタジーな世界の数千年後です。詳しい世界観などは設定集の方に掲載されていますのでそちらをご覧ください。

## 第0話 「プロローグ」

放浪の鷹 第0話 「プロローグ」

この世界に救いはあるのだろうか、人の果て無き欲望はやがて悪意となり世界に蔓延する。かつての救いもういない、ならば俺がこの世界の希望の光になろう、全てを照らす希望の光に。

鷹梨 将兵

コツンコツンと夜の学校の廊下を一人の少年が歩いている。年は14歳程の小柄な少年、髪の色も瞳の色も日本人に多い黒、何処にでもいそうな普通の少年である。ただ一つ両手に握った拳銃を除いては・・・

「そろそろか？」

少年が呟いたその時、ピーーッ

少年の腰の無線機から呼び出し音が鳴り響いた。

「はいこちら鷹梨です」

「やつほあゝ、雪奈ちゃんですよ。将兵君大丈夫？怪我してない？」

「はいはい、雪奈姉わかったから標的は？」

「はいはい、標的は現在シーカちゃんが撃滅している最中よ」

「は？シーカが何で！今回の任務は俺1人のはずだろ」

「シーカちゃんかね、ど〜〜〜〜うしても将兵君と一緒に任務がし

たいつて言うから、それに五指星の権限使われちゃうと私としては認めるしかないのよね・・・ごめんね」

・・・よりもよってシーカかよ・・・最悪だ

「まあまあそんなに怒らないでシーカちゃんは・・・!？」

「・・・?どうした雪奈ね「中級ハームが一体そちらに向かっているわ気を付けて!」

「!??・・・了解」

大丈夫だ殺れる中級程度ならばアレを使わなくても・・・いける!

俺の強い思いに反応したのかそいつは現れた、黒い体毛に二つの首を持つオオカミ、さらに異常なのはその大きさ・・・優に2メートルはある

「でかいな・・・」

場所を変えるか・・・俺は窓ガラスを割り外に出た。

ドガアシャアーン

俺という獲物が逃げたと思ったのか二首のオオカミは俺を追って外に出てきた。俺はグラウンドの中央辺りまで来ると後ろを振り向いた。二首のオオカミは俺が止まったことを好機と捕らえたのかよりスピードを上げてきた。

俺はオオカミに向かって右手の銃を構えて撃つ、撃ち出された弾は鉛弾ではなく炎弾、炎弾はオオカミの頭の1つを消し飛ばした。

「グウルアアア」

頭を潰された痛みにとうち回るオオカミに俺は右手の銃『ファルコン』と左手の銃『イーグル』を同時に向ける、これらの銃には『魔陣術』と呼ばれるものが組み込まれており自身の魔力を込めると組み込まれた魔陣術の属性の弾を放つことができる。

ファルコンには炎の魔陣がイーグルには風の魔陣がそれぞれ組み込まれている。そのため両方の銃を同時に放てば風を炎が取り込みより強力な弾を撃ち出すことができる。

「これでさよならだな、生まれ変わったら来世でまた会おう」

俺は決めゼリフを言い引き金を引いた。

ズゴオオオオオ

多めに魔力を込めた事も相まって5 m程の巨大な炎弾がオオカミを襲い跡形もなく消し飛ばした。

「ふう〜終わった・・・か？」

俺が呟いたその時、

「グアガアアア」

爆煙の中から小型のオオカミが現れ俺に襲いかかってきた

「く！？」

俺は咄嗟にファルコンを向けるがオオカミの方が速い！

「ダメか」

せめてもの抵抗と俺はオオカミを見た、額に小型の宝玉が付いている・・・あれがハームの『コア』か・・・案外綺麗だ。

俺が死を覚悟した瞬間、

「だ・め・だ・よお〜油断しちゃ」

そんな声と共に突然俺の意識は途切れた・・・













































## 第1話 「ハームとルールと五指星」

放浪の鷹 第1話 「ハームとルールと五指星」

この世界には『ハーム』と呼ばれる存在がいる。ハームはこの世界の深淵より生まれるとも地獄からの使者とも言われているが真相は定かではない。ハームのことを説明するには『正体不明の化け物』これに限る。ハームは体のどこかに必ず『コア』と呼ばれる心臓部を有しており、コアを潰さない限りハームは殺せないし放っておけば再生する。ハームは人を喰らい寄生するため、人に害をなす存在であり対話の余地はない。最後にハームは人の悪意を栄養に成長するため貧民街や邪悪な心の持ち主のところへ出現しやすい。

アルマージュ・エルティンギス博士の論文から抜粋

「くう・・・朝か」

朝陽の光を受けて俺は起き上がった、昨日は『ロンバレル学園』でハームの反応を複数確認したって報告があつて夜遅くまでハーム退治してたからな、ん？・・・待て俺はなぜこんな場所で寝ている？昨日のオオカミはどうなった？

俺はそこまで思い出すと辺りを見回した、1LDKのボロアパート、古びたタンスにくたびれた布団・・・間違いなくここは俺の部屋だ、つーかさっきから右腕が動かないんだけど何で？

俺は首を動かして右腕を見ると・・・

「うっん将ちゃんもう食べられないよ、でも・・・嬉しい。将ちゃんか愛を込めて作ってくれたものだから私は頑張る！」

なにやら寝言とは思えない寝言をほざいている少女が俺の右腕に引  
つ付けていた。

「おい、シーカ起きろ！」

このままでは埒が開かないので俺は少女ことシーカを起こす。

「うゝゝん、ふあゝゝ将ちゃん何事？」

「シーカまず聞いておきたいなぜ俺はここにいる？」

「うん？それは私が気絶した将ちゃんをここまで運んだからに決ま  
ってんじゃない」

やはりそうか・・・どうやらあの後俺は気絶してしまったようだ

「なるほど、それは分かった次は何でシーカがここに居る？」

「ああ、それはね将ちゃんをここに運んだら部屋の中が将ちゃんの  
匂いでいっぱいだったからつい・・・」

俺は額に青筋を立てながら最後の疑問を聞いた。

「では最後にして一番重要なことだが・・・なんで俺は上半身裸で  
下はパンツだけなんだ？」

そうなのだ、やけにスースーするなと思ってたらパンツしか履いて  
ないのだ俺、さらに隣で引っ付いているシーカもブラにパンツとま  
るで・・・

「シーカお前まさか・・・俺が寝ている間に変なことしてない  
よな？」

俺の言葉に頬を染めいやいやをし出すシーカ

「いやんばかん、将ちゃんのエッチ。私はただ将ちゃんのピーを私  
のピーでピーしただけだってゝゝゝもう、いやん」

おいしいい！シーーカアアアアアアアアア。なにしてくれ  
とんじやあああああつあああああつあああああつあああああ  
あああつあああ

あの後何とか気を静めて俺たちは今ルールの本社ビルの中にいる、昨日のハーム討伐任務の完了手続きをするためだ。

「五指星のナラカ様、本部長が呼びです至急第88会議室までお越し下さい」

「あ！なんか私本部長に呼ばれているから行ってくる。ちょっと待っててね」

「へえ！本部長に直接呼び出しを受けるなんてさすが『五指星』だな。

「もう！またそんなこと言って、将ちゃんだって五指星レベルじゃない。『スキル』を持ってないのに凄い強いじゃん！？そうだ今日の話が終わったら本部長に将ちゃんのこと五指星に推薦しといてあげるね。」

そう言いながらエレベーターに向かって駆けていくシーカ、五指星なんかになりたくないよ。と心の中で言っていた。

さてここら辺で一旦今までの情報を整理するか、『ルール』とは100年程前に生まれるようになったハームを撃滅すべく結成された組織でその歴史は浅いが国中から強力な『魔陣師』や魔陣以外の特異な能力『スキル』を持った者が集められ組織としては巨大になり今では『世界統合政府』の直轄組織である『百刃』や『雷帝師団』などと並び世界統合政府の中で強大な力を有する組織だ。

ルールはピラミッド構造をしており一番上に総帥、次に本部長と言った感じになっている・・・そしてピラミッドの一番下に俺たち一般の戦闘員がいる。戦闘員は全員戦闘能力でA～Eまでの5段階のランク付けがされ、それぞれのランクに見合った仕事をルールか

ら言い渡される。この特殊な組織形態は数千年前に存在したとされる傭兵団『ぎる〜ど』を参考にしたからだとか。

最後に『五指星』についてか・・・五指星は総帥直属のエリート戦闘員でその名の通りメンバーは5人。五指星は先も述べたスキルを極めた能力者達で全員が強力なスキルを有しており五指星はプレイヤーを守る為に本名ではなくスキルの名前で呼ばれる。シーカの場合は『ナラカ』が五指星の名前だな、それと五指星になると本部長と同等の権限が与えられるため目指す奴は多い、俺？・・・俺は目指さないよ面倒臭いしな・・・

「将兵君！やつと見つけた」

とその時雪奈姉が俺のところに駆けてきた、ん？なんか妙に焦ってね？

「将兵君こんなところで何やってるの！？」

「よ〜〜雪奈姉どうした？そんなに息切らせ・・・ズオウ！？」

いきなり走ってきたかと思えば俺の襟首掴んで引きずる雪奈姉ちょ、こすれてる！こすれてる！熱い熱い熱い！！！！！！

〜10分後〜

さてただ今私第88会議室で正座させられています・・・なんでこうなった？

あの後80階まで階段をマッハで昇る雪奈姉と引きずられる俺・・・そして80階に着いた途端に第88階会議室に放り込まれた。あまりの勢いで放り込むもんだから本部長さんにぶつかりそのひょうしにキスしてしまったじゃないか・・・うえ・・・とまあそんなこんなで現在俺は正座しながら本部長さんのありがとうございました〜いお話を聞いている。

[illegible]

32

































## 第2話 「昇格試験と魔陣術と魔導具」

放浪の鷹 第3話 「昇格試験と魔陣術と魔導具」

魔陣術とは数千年前、この世界にドラゴンや魔獣などが生息し文明レベルが低かった頃から伝承される唯一の術。

魔陣術は個人が持つ『属性』を魔力に込めて魔方陣を描く、あとは描いた魔方陣に自身の持つ魔力を流してやれば勝手に発動する。赤の魔方陣なら炎、青の魔方陣なら水、緑の魔方陣からは風の、茶色の魔方陣からは土、黄色の魔方陣ならば雷の魔陣術が放てる。

出力の調節は流す魔力の量によって行う。魔方陣は己の持つ属性の種類しか刻む事が出来ないため炎の属性持ちが水の魔方陣を刻む事は出来ない。最後に魔方陣は陣を壊さない限り何度でも使える永久機関だ努々手入れを忘れないように。次回は黒と白の特殊魔方陣についての授業を行う、欠席しないように、欠席すると単位が・・・

ロンバレル学園講師リチャードによる授業（一部省略）

「はあ」

俺は青空を見ながらため息をついた。ここはロンバレル学園の屋上、今は昼休みだ。昨日ルール本社で五指星昇格試験の受験が正式に通達された、これは命令であるから拒否権などなくつまりは絶対に昇格試験を受けなければならない訳だ。

「どうしたの？将ちゃんため息なんかついて」

それもこれも全ての原因は俺の隣でイチゴミルク飲んでるお馬鹿さんのせいです、はい。

「いやシーカの所為だから」

「何が？」

「ああ？昇格試験に決まってるだろ昇格試験に！」

「なーんだそのことか、それなら私の所為じゃないよ」

「は？何で」

「私が将ちゃんを推薦する前に五指星会議で決まっていたんだもん」  
「うん？シーカが推薦したわけではなかったのか、悪かったなシーカ」

「うっん、別に良いよ！将ちゃんに蹴られるのも別のか・い・か・ん。あふう~~~~うにゃあ」

はい、変態ですねご馳走様です。脳内のお花畑にトリップしているシーカを放っておき俺は考える。五指星会議で決まったね・・・  
・・厄介だな。

五指星になるためには2段階の試験をクリアしなければならない  
一つ目は五指星メンバーの推薦を受けること。これが中々難しい五指星メンバーは破綻者が多いため会うどころか話すことすら難しい  
さらに言えば五指星メンバーは本名が秘匿されるため『検索』によって住所を検索することも不可能だからだ。

二つ目の試験は至極単純。推薦によって資格を得られたら、現役の五指星との一騎打ちで勝利すれば晴れて五指星になれる。

残念ながら制度上、五指星は例外なく強いので強力なスキルを有していないと対抗は難しいだろう。

「だいじょーぶ、将ちゃんなら勝てるよ・・・運が良ければ」

「運が良くても俺じゃ勝てないよ」

「大丈夫だよ、イクスやデステイニーは無理かもしれないけどトラ

ンスやハーフなら将ちゃんでも勝てる・・・多分」

「はは、シーカの多分ほど信用できないものはないな」

俺は軽く笑いながら今日の一騎打ちのことを考える。昇格試験の相手は推薦者を除いた4名の中から決められるため俺が闘う可能性があるのは『イクス』、『デステイニー』、『トランス』、『ハーフ』の4人の内だけか、五指星最強とも名高い『イクス』と当たつたらまず勝てないだろう。

『デステイニー』は五指星であるシーカですら良くわからない相手らしい。噂ではデステイニーこそがハームを生み出している元凶で能力が運命操作のため世界を自分の都合の良いように操っているだとか言われている。正直運命操作なんて使われたら勝てる気がしない。そのため消去法で俺が勝てる可能性があるのが残りの2人『トランス』と『ハーフ』だけなのだが、この2人も五指星で有る以上半端な強さではないだろう・・・本当面倒くさい。

「将ちゃんだつてAランクの戦闘員なんだから、もっと胸を張っていれば良いのに」

「あのなあシーカ、俺はAランクまで上がれば満足なんだよ、だから五指星なんてなくてもな」

五指星は高給に始まり五指星専用の邸宅が支給されたり本部長と同等の権力を有していたりと、五指星をよく知らずに憧れる奴も居るが五指星は良いことばかりではない。

まず権利と引き替えにある義務が発生する。五指星は必ず1人は常に本部に在駐しなければならない。これはもし仮に上級以上のハームが出現した場合やルール本社ビルに対してテロが起きた場合など、緊急事態が起きた時にルールの有する最高戦力として出勤出来るようにするためだ。

そして五指星になると暗殺される可能性がグンと上がる。実際過

去には五指星になった次の日に暗殺され死んだ奴もいる。

このように五指星は常に厄介事と付き合っていかなければならないため俺はなりたくない、だが今回のことは五指星であるシーカの推薦ではなく五指星会議による議決のため手抜きは勿論、試験は必ず受験しなければならない。違反すると最悪戦闘員の免許を剥奪されるかもしれない、それほど五指星会議の議決とは重い。

つまり全力で昇格試験に挑まなくてはならない。

「悪いシーカ、俺試験のために魔導銃の整備に行ってくるわ」

「いつてらっしゃい、私も今日はサボるね」

俺たち位の年齢ならば学校は必ず出席しなければならないが俺たちは戦闘員いわば傭兵だ、そのため学校の授業など出なくても問題ない。俺はさっそく魔導銃を強化するために帰路についた。

魔道具とは魔陣術が刻まれた導具の総称である、俺の銃イーグルとファルコンも魔導具の1種で銃身に5大基本属性の魔陣術が全て刻まれている。ファルコンには火、水の2属性がイーグルには土、雷、風の3属性の魔陣が刻まれているため定期的に魔陣師に鑑定してもらい必要であれば修理もしてもらう。明日の昇格試験ではこれから2丁の魔導銃ともう1つの切り札で挑むつもりだ。

実を言うと俺もスキルが使える。しかし明日の昇格試験では使わないつもりだ。理由は俺のスキルは強力だが酷く扱いづらいため。・・・果たしてこの程度の戦力で勝てるのかどうか・・・勝つ必要なくね？

























































### 第3話 「試験開始」

#### 第3話 「試験開始」

ルール本社ビル92階 特別会議室

そこは不思議な部屋であった、高級ホテルのスイートルームのようない広い部屋、その部屋の中央に円卓が据えられている。部屋の中に円卓と椅子以外余計なものが無い空虚な部屋。円卓に座する者は5名、肩まで伸びる白髪に鋭い赤目の男。長い黒髪をポニーテールにし腰に刀を差しているセーラー服少女。腰元まで伸びる金髪にゴシックドレスを着ている美しい女性。手に薔薇を持ち優雅に香りを楽しむ美少年。そして、燃えるような赤い髪を肩まで流した少女。「それで、将ちゃんの相手は決まったの？」

赤い髪の少女・・・シーカが最初に言葉を発した。

それに答えたのは金髪ゴシックドレスの女性・・・デステイニー

「当然、でなければ貴女をここへは呼びませんよナラカ」

「ナラカが除外されたくしとイクスも勿論除外・・・なればトランスかハーフのどちらかの選択ですもの」

デステイニーの言葉に白髪赤目の男・・・イクスは応えない。

「・・・下らん」

代わりとばかりに答えたのは刀少女・・・トランス

「最初から私がハーフの2択ならさっさと決めてしまえば良からう、時間の無駄だ」

「ふーん、それで将ちゃんの相手はどつちなのか？」

そこでようやくイクスが言葉を発した。

「ああ、例のAランク戦闘員の相手は・・・」

俺は現在、頭上の青空を見上げている。理由は特に無いんだがいかんせんやる気が出ない、そもそも何で俺の預かり知らぬところで勝手に話を進めるのかな。俺は五指星になんてなりたくないのに・・・俺がここまで五指星になることを忌避する最大の要因達が来た。1、2、3、4、5・・・間違いない五指星だ。

俺はナラカ以外の4人の五指星を眺めた。刀剣ポニーに白髪にゴシックドレスにナルシストか・・・何このあり得ない組み合わせ！？噂通りに変人ばかりみたいだな。

「あなたが昇格試験を受ける鷹梨将兵衛、わたくしはデステイニー、こちらがイクス、トランス、ハーフよ」

啞然とする俺に白髪とポニーとナルシストを紹介するデステイニーと名乗った女。こいつがデステイニーか・・・とんだ化け物だな、気配を感じ取る事が出来ない。これでは目で直接見なければ女の存在を認知することが出来ない。

「さつさと試験を始めよう、なれ合いなど時間の無駄だ」

！？・・・コイツいつの間に。

いつの間にか俺の背後に立っていた刀剣ポニーテール

「お前が俺の相手か？」

俺は五指星どもの発する威圧感に負けないように威勢良く言っただけ・・・内心はガクガクブルブルだけだな。

「いいや、私は勝負の判定を決める審判。お前の相手はアレだ」  
そう言っただけナルシストを指差すトランス・・・アレかよ！？



馬鹿な・俺は確かに見たバーストショットが奴に当たる瞬間白い片翼が生まれバーストショットをかき消した。弾いたのでも避けた訳でもない・・・かき消したのだ。

「くはは僕の半翼の能力に驚いているようだね」

「半翼だと!？」

半翼とやらが奴の能力か。

「くはは僕的能力を教えてあげるよ。僕の半翼は黒翼と白翼からなり黒翼は反物質で構成され僕から一定以上離れると先ほどのように大爆発を起こす、逆に白翼は僕から一定以上離れると消滅してしまうが触れた物を消滅する力がある。ふふ美しい力だろ？」

・  
・  
・  
冗談だろ？なんて能力だよ！？

俺は咄嗟にイーグルの魔陣を土属性に変え地面に向けて撃った。

「喰らえアースバウンド」

俺が撃った地面が隆起し地割れを引き起こしナルシスト野郎を飲み込んだ、無論この程度で倒せる程あまい相手ではない、だから俺はこの隙にもう一つの切り札を発動させる。

「発するは赤・・火炎。欲するは青・・水流。瞬くは黄・・閃光。蠢くは茶・・岩壁。吹き抜けるは緑・・烈風」

俺の周りに赤、青、黄、茶、緑の属性球が出現する、そして俺はそれら5つの属性球をファルコンとイーグルの間にまとめる。

「くっ」

それぞれの相反する属性球が反発し合うのを力ずくで押さえ込み  
1つにまとめる。1つになった属性球は一回り大きくなり白光を放  
つ、その様子はまるで小さな太陽のようでもある。これが俺の最後  
の切り札、混沌弾だ。

**ズズン・．．ズドオオオオオオオオオオオオオオオオ**

地面を上空に吹き飛ばしてナルシスト野郎が現れた……ここだ！

「喰らいやがれカオスフレア！」  
俺はカオスフレアをナルシスト野郎に向かって放った。瞬間俺の視界を閃光が真っ白に染め上げた。

気が付くと俺は倒れていた。

「くうあ」

吹き飛ばされた時の痛みが少し残っているが無視して起き上がる。  
今はまだ試験の最中だからな・・・奴は何処へ行った？

カオスフレアの衝撃で吹き飛ばされながら確かに俺は見たナルシスト野郎が白翼でカオスフレアを迎え撃つのを

「奴は・・・何処だ？」

その瞬間俺は直感的に地面へと伏せた。するとさっきまで俺が居た場所を黒い羽根が通り過ぎた。

ドゴオオオオオオ

遠くで爆発する音を聞きながら俺は羽根が飛んできた方向を睨み付けた、そこには・・・全身をボロボロにしたナルシスト野郎がいた。

「よう随分カッコ良くなったじゃないか」

俺は敢えて挑発をしてやった、俺の言葉にビクンツと肩を振るわせ  
て俺を睨み付けるナルシスト野郎。

「き・・・きさま！ころおおおおおおおおす」

怒りに任せて俺を黒翼で殴りつけてくる。

「ぐう」

俺は腹に黒翼の直撃を受け吹き飛ぶ。数？吹き飛ばされようやく俺の体は止まった。先ほどのカオスフレアは正真証明俺の全魔力を込めたため今の俺には魔力残量はゼロ、体力もかなり落ちてきている。

客觀的に見れば俺の負けだろう・・・だが・・・

「くくく、はははは」

俺は止めどなくあふれる笑いを止めることが出来なかった。

「何がおかしい、貴様！」

笑い続ける俺に腹を立てたのかナルシストがまたも黒翼で殴りつけて来た。ナルシストも近くに居るため羽根は飛ばさず黒翼を叩き付けてきた。だが黒翼で殴りつけるだけで何トンものトラックに衝突されたような衝撃を受ける。

「くはははは」

何度吹き飛ばされても俺は笑い続けた。吹き飛ばされながら笑い続ける俺を気味悪がったのかナルシストの顔が引きつる。

「くく、いやいやすまないな・・・さて、そろそろこの下らない茶番を終わらせるとするか」

「終わらせる・・・だと？ふふ良いだろう、そんなに死にたければ死ね！」

ナルシストはこれで最後だと言わんばかりに俺に向けて黒翼を放った。俺は・・・それを掴んだ・・・

「な！？」

俺はそのまま黒翼を握りつぶした。

「な・・・何だこれは！？何が・・・」

俺は動揺するナルシストを余所に足で地面を軽く叩いた。

「ぐあ」

それだけで見えない何かに潰されるナルシスト野郎、俺はゆっくりと近づき眉間にファルコンを突きつけた。

「これで・・・俺の勝ちだ」

その瞬間勝負は決した・・・最後の最後で能力使っちゃったな。あれだ試合に勝って勝負に負けるって奴。

俺はこれから起こるであろう厄介事を案じながら空を見上げた。







































## 第4話 「トラブル」(前書き)

訳あつてこの回から三人称視点です。実ははじめての異世界の方が三人称に変わりました、こちらの方もつられて三人称になりました。

更新について

えゝ放浪の鷹のこれからの更新スピードですが、1週間に1回は更新出来ると思います。少ないですがお気に入り登録をされている方もおりますのでこれから確りと書いていきますのでどうかよろしく。

## 第4話 「トラブル」

### 第3話 「トラブル」

「そこまで、勝者……」

そこまで言いかけて言い淀むトランス。トランスは少し考えた後ポ  
ンと手を叩いて将兵に名前を聞いてきた。

「おい、貴様名は？」

「ん？将兵だけど……鷹梨 将兵」

気だるそうに答えた将兵、対してトランスは高らかに勝者の名を宣  
言した。

「勝者、鷹梨 将兵」

この瞬間、新たな五指星、『インフィニティー』が誕生した。

翌日朝、

将兵は朝早くからルール本社ビルに呼び出されていた。

「はぁ、面倒臭いな」

朝早くから呼び出さればやいている将兵の元に雪奈がやって来た。

「聞いたわよ、将兵くん五指星になったんだってね。」

「ああ、ありがと雪奈姉、それで今回は？」

将兵は今回呼ばれた理由を聞いていないため、雪奈に理由を聞いた。

「今回はね……ずばり五指星のコードネームを決めるのよ！」

「ちょ・ちょつと雪奈姉落ち着いて」

興奮する雪奈をなだめる将兵、だが雪奈は更にヒートアップしていく。

「これが落ち着いて居られますか、コードネームよ全ての戦闘員の憧れよ！そもそも・・・」

「はいはい、もう分かったから・・・さっさと案内してくれよ」

しびれを切らした将兵が雪奈を引っ張りながら階段へ向かう。

「あゝ、ちょ・ちょつと待って・・・将兵くんのコードネームを決めるのは最上階にある特別審議室だから私は入れないの」

「ん？そうなのか・・・でも良いじゃないか途中までなら」

最上階に行くのを渋る雪奈、だが特別審議室の場所が分からない将兵は雪奈の背中を押して階段へ向かわせる。

この時の将兵は気づいて居なかった、自分のしている行為がどのような意味を持つのかを・・・。

最上階行き特別エレベーターの扉が開き将兵と雪奈が出てきた。

「へえ、ここが最上階か」

「・・・うん」

今まで来たことの無い場所へやって来た好奇心からきよろと辺りを見渡す将兵に対して雪奈の表情は硬かった。

「それで雪奈姉、特別審議室って何処に・・・」

「貴様あ！何をしている」

将兵が雪奈へ特別審議室の場所を聞こうとした時、トランスが殺気を放ちながら雪奈へ斬りかかってきた。

「！？・・・雪奈姉！」

将兵は雪奈の前に出るとイーグルとファルコンで刀を受け止める。

「お前はトランス！？」

将兵は斬りかかってきた相手が五指星の1人だと認識した瞬間トランスの足を払った。そして雪奈を抱きかかえて10m程跳躍して距離を取る。

「・・・おい、何のつもりだ？」

将兵は殺気を込めながらトランスを睨む。対して立ち上がったトランスも将兵を睨み返した。

「それはコッチの台詞だ！・・・貴様その女を庇うつもりか？」

「庇うだと？雪奈姉が何をした！」

殺気を込めて怒鳴るトランスに対して将兵も殺気を込めて睨み返す。  
「・・・貴様、もしや知らないのかこの掟を」

「知らないのであれば教えてやろう、ここルール本社ビルの90階以上は部外者の進入は厳禁・・・破れば重罰が与えられる」

トランスの言葉を理解した瞬間将兵の背筋を冷たいものが流れた。

「ちょ・・・ちよつと待ってくれ・・・本当なのか雪奈姉！」

将兵が慌てて雪奈へ問うと雪奈はゆっくりと頷いた。それを見た将兵は階段前でのやり取りを思い出す。

そうだ、確かに雪奈姉は最上階へ入れないと・・・

「理解したか新入り、その女は無断で最上階へ足を踏み入れた。その事実だけで死罪に値する！」

「ま・・・待て！待ってくれ・・・雪奈姉は俺が無理に連れて来たんだ、だから！」

「問答無用！」

将兵は雪奈を弁護するがトランスは聞く耳を持たず、雪奈へと斬りかかる。

「くつ仕方がないか・・・」

刀で斬りかかってくるトランスに対して銃を構える将兵、2人が激突しようとしたその刹那、

「・・・おやめなさい」

静かに、冷たくそれでいて強く2人を止める声が響いた・・・。

その声が聞こえた瞬間将兵とトランスは止まった。いや、止められた・・・と言うべきだろう。

将兵の後ろにデイスティニーが、トランスの後ろにイクスがそれぞれ立っていた。たったそれだけ、たったそれだけで将兵とトランスは動けなくなった。2人から発せられる威圧のみで将兵もトランスも動けなくなったのだ。動けば死ぬ、2人はそのことを体で理解していた。

「・・・話は聞いていたわ、確かにこのフロアは部外者は立ち入り禁止・・・なれど五指星同士の私闘は最大のタブー」

「・・・つまり貴様等の行おうとしていた事こそ、まさに重罰の対象だトランス」

デイスティニーの言葉に繋げるようにイクスがトランスを宥める。

「つまり・・・どうということ？」

1人状況が理解出来ないナラカは首を傾げる。

「つまり、彼女の処分は保留よ、だから武器を収めなさい2人とも」  
デイスティニーの言葉に渋々武器を降ろす将兵とトランス。

「・・・これは新五指星の任命式をやれる雰囲気ではないわね・・・  
・・将兵君今日は帰っていいわ、また明日ここに来なさい」

デイスティニーはそう言うと唐突に消えた、そしてイクスもトランスもその場を立ち去る。

こうして将兵にとって最悪の1日は幕を閉じた・・・。



























































## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0358x/>

---

放浪の鷹

2011年11月15日13時02分発行